

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第4集

上ノ台遺跡

1 9 8 1

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第4集

うえ の だい
上 ノ 台 遺 跡

1 9 8 1

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

県立玉淀長瀬自然公園は、地質学的にも観光地としても県内外に広く知られています。

特に、地質学の宝庫と言われる秩父地方にあって、長瀬は俗に岩畠と呼ばれる結晶片岩が露頭し、岩石の観察に好適地でもあります。

この地には古くから秩父自然科学博物館が開設され、内外の研究に大きく貢献してまいりましたが、今回装いも新たに県立自然史博物館が建設される運びとなりました。

博物館地内は、上長瀬古墳群の一部として知られており、建設計画に合せて昭和53年度から55年度にわたり、合計3回の発掘調査が実施されました。

本書は、この調査結果をまとめたものであります。多くの新事実も発見され、記録保存はもとより、これらの資料が広く教育、文化、学術研究の資料として活用されることを期待いたします。

発掘から報告書刊行に至るまで、終始御指導、御協力を寄せられた関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和56年3月

財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 関根秋夫

例　　言

1. 本書は県立自然史博物館建設にかかる上ノ台遺跡の発掘調査（昭和54年54委
保記第22—449号・昭和54年54委保記第22—1668号・昭和55年委保第5の4249
号）報告書で、遺跡は秩父郡長瀬町大字長瀬字上ノ台1418—2他に所在する。
2. 発掘調査は、第1次、2次調査を文化財保護課第3係が実施し、第3次調査
及び整理は県教育局財務課の委託を受け、当事業団が行った。
なお、発掘調査の組織は2ページに示したとおりである。
3. 出土品の整理は、増田逸朗、曾根原裕明があたり、高橋一夫、今井 宏の協
力があった。
4. 本書の執筆については各文末に記したとおりであるが、横川好富が加除筆を
行った。
5. 本書の編集は事業団調査研究部第4課の職員がこれにあたった。

目 次

序

例 言

I	発掘調査の概要	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査の経過	3
II	遺跡の立地と環境	5
III	遺 跡 の 概 觀	8
IV	遺構と出土遺物	10
(1)	1号墳	10
(2)	土 墓	12
(3)	溝	12
(4)	溝出土須恵器	14
(5)	縄文土器	15
(6)	石 器	16
V	ま と め	22
(1)	上ノ台1号墳と秩父の古墳	22
(2)	縄文土器と石器について	27

挿図目次

- | | |
|----------------------------|--------------------------------|
| 第1図 第1次調査区 発掘風景 | 第8図 土壌実測図 |
| 第2図 遺跡周辺の風景
(宝登山中腹より臨む) | 第9図 溝実測図 |
| 第3図 遺跡の位置図 | 第10図 溝出土須恵器 |
| 第4図 調査区全体図 | 第11図 繩文土器 |
| 第5図 1号墳全測図 | 第12図 第2次調査区出土石器 |
| 第6図 石室実測図 | 第13図 第2次調査区出土石器、第1次
調査区表採石器 |
| 第7図 墳丘及び石室断面図 | 第14図 第1次調査区表採石器 |

図版目次

- | | |
|----------------------------------|--------------------|
| 図版1 第2次調査区 発掘風景・第3
次調査区 全景 | 塞石 |
| 図版2 第2次調査区 土壌・第2次調
査区 溝 | 図版5 石室全景・付近の古墳近景 |
| 図版3 第2次調査区 溝内土器出土状
態・第3次調査区 磔 | 図版6 付近の古墳近景・露出した玄門 |
| 図版4 石室全景及び閉塞石・玄門部閉 | 図版7 繩文土器・繩文土器 |
| | 図版8 繩文土器・溝出土須恵器 |
| | 図版9 打製石斧・打製石斧 |
| | 図版10 打製石斧・打製石斧 |

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県を代表する景勝の地長瀬は、荒川の形成した変化のある渓谷美と特異な地質から大正13年12月9日に、国の名勝、天然記念物に指定されている。

秩父地方は、秩父市を中心とする秩父盆地とそれを囲む第三紀層から成る山々が重畳と続き、そのすぐれた地形、地質は古くから自然科学の宝庫として注目を集めている。

この様な自然環境の中に、秩父鉄道株式会社により「秩父鉱石標本陳列所」が長瀬の地に開設されたのは大正10年のことであった。

その後昭和24年には、これまで収集された豊富な資料をもとに、動物・植物部門を加え、その名も「秩父自然科学博物館」として新スタートを切ったのであった。又昭和25年には秩父多摩国定公園の設定に伴い、同公園内唯一の自然科学をテーマとする博物館となり、昭和30年に文部省令による博物館相当施設の指定を受け、地域を代表する特色ある博物館として発展するに至った。

埼玉県では学術、文化振興政策の基本に博物館、資料館等各種施設の建設を進めているが、県立の機関としての自然系博物館建設の構想が中期計画の中で盛り込まれた。

この計画を推進するにあたり、当初県民部県民文化課が博物館準備事務を担当していたが、昭和52年からはこれまでの事務を教育局文化財保護課が継承した。

具体的な計画が検討され、その結果昭和53年6月に、先の秩父鉄道所有の秩父自然科学博物館及び、隣接の社屋を取り壊し、その跡地に新博物館を建設することが確定した。

ところが、この同地内には埼玉県遺跡地名表、同地図登載の長瀬町No.41遺跡が所在しており、この取り扱いについて内部で協議されたが、建設計画の中でこれらの文化財を現状保存することは設計上困難であるため、事前に発掘調査を実施することになった。

調査は工事日程の関係により3次にわたって実施された。

工事の主体者は埼玉県（知事 畑和）で、調査主体者は埼玉県教育委員会（教育長 石田正利）で、実施担当は文化財保護課がこれにあたった。

そして事前の法的手続きとして知事からは文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘通知を、埼玉県教育委員会からは同法98条の2の規定に基づき調査通知を文化庁長官へ提出して調査が開始された。

(駒宮史朗)

発掘調査の組織

第1次、2次調査

主 体 者	埼玉県教育委員会	教 育 長	石 田 正 利
事 務 局	埼玉県教育局文化財保護課	課 長	杉 山 泰 之
		課 長 補 佐	奥 泉 信
			木 戸 一 恵
企 画 調 整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	栗 原 文 藏
			柿 沼 幹 夫
			駒 宮 史 朗
			井 上 尚 明
庶 務 経 理	埼玉県教育局文化財保護課	庶 務 係	畔 上 敦 志
			太 田 和 夫
			千 村 修 平
発 掘 調 查	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長	横 川 好 富
			増 田 逸 朗
			高 橋 一 夫
			曾根原 裕 明

第3次調査及び整理

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	関 根 秋 夫
		副 事 長	本 郷 春 治
		常 務 理 事	渡 辺 澄 夫
庶 務 経 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	伊 藤 悅 光
			関 野 栄 一
			福 田 浩
			本 庄 朗 人
調査及び整理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横 川 好 富
		調査研究部第四課長	増 田 逸 朗
			曾根原 裕 明
協 力 者	秩父郡長瀬町教育委員会		
	自然史博物館準備事務所		
	地元区長及び地元住民		

2 発掘調査の経過

第1次調査（昭和54年2月19日～3月23日）

2月19日、本日より第1次調査を実施する。調査区は、秩父鉄道自然科学博物館、同有隣クラブ敷地に町道を挟んで隣接する雑草地で、広さは1辺 $20 \times 90\text{m}$ を測る。

調査区内の様相は、昨年夏の試掘で一部トレンチを設定し、この範囲内だけは雑草木を除去したが、一部には植木・雑木が生い繁り、初日は作業員、自然科学博物館職員総出動でこの植木を移植する作業に取りかかる。

又、1号墳周辺には目通り $20 \sim 30\text{cm}$ 程の雑木が数本見られ、これは職人を頼んで伐採する。

まず、調査方法としては、昨年の試掘結果を参考にし、雑草木除去の後、表土をブルドーザーで削平することとする。

この排土置き場を確保するため、基盤砂利層が浅い北側に幅 1.5 m のトレンチを設定し、あらかじめ調査を優先させる。

この結果、試掘時と同様、基盤砂利層は浅く、5本設定したトレンチ内の覆土も攪乱が激しく、トレンチ排土時に見るべき遺物もなく、一応、当北側トレンチ調査区上にブルドーザーによる削平土を集積することとなる。

2月下旬、予定通り軽量ブルドーザーを導入する。昨年の試掘結果を参考に、表土は深さ $15 \sim 20\text{cm}$ を目標に削平し、削平面が乾かぬ内、ジョレンで清掃し、遺構確認作業に入る。



第1図 第1次調査区発掘風景

この結果、調査区中央から、南側にかけて、部分的に2次堆積ロームが見られ、ここに遺構の存在が予想された。

削平面には、 $4 \times 4 m$ のグリッドを全面に設定し、取りあえず千鳥でグリッド内を排土する。

3月に入り、1号墳の調査に入る。

墳丘上に生えていた雑木を伐採し、墳丘を清掃した結果、墳丘には河原石の転石が露出し、又、周辺には多量の片岩等も散乱しており、かなり攪乱されている事が予想された。

まず、墳丘南側に2本のトレンチを設定し、周溝確認作業を主体にして掘り始める。

墳丘中央には、清掃の結果、すでに、奥壁、玄門と見られる片岩が露出しており、当初から横穴式石室であろう事が推定された。

3月中旬には、ほぼ石室も掘り上がり、胴張の小形横穴式石室である事が確認されたが、残念ながら石室内からの副葬品、墳丘上の埴輪等は検出されなかった。

石室前庭部は、現町道下に広がっていたが、町当局の許可を受け、調査を実施することが出来た。

3月23日、石室の実測、写真撮影、全測図作成作業を済ませ、第1次調査を全て終了させる。

第2次調査（昭和54年10月1日～10月30日）

秩父鉄道有隣クラブ敷地内の調査に当たる。第1次調査時にすでに、クラブ建物間に数本のトレンチを設定し、試掘の結果、2次堆積ロームが部分的に存在することが確認されていた。

このローム周辺からは、試掘時のトレンチ内、グリッド内から繩文土器片も見られ、遺構の存在が予想されていた。今回の調査は、試掘の結果を参考に、一応、ブルドーザーで表土を削平することとした。

この結果、建物敷地内は基礎コンクリートが深く、かなり攪乱されており、遺構の保存状態は最悪であった。

結局、調査では、時期不明の土壙2基、溝状遺構1基が発見され、溝からは須恵器10数片、釘状鉄器数点が検出されたのみであった。

これに加え、調査区西側では繩文の包含層が見られ、諸磯式土器、加曾利E式土器の破片と、打製石斧が少量検出された。

第3次調査（昭和55年12月1日～12月19日）

今回の調査は、新館の通路入口部分の調査である。

一応、調査区の面積は、 $30 \times 12 m$ 程で、旧自然科学博物館を撤去した土台の部分にかかり、攪乱が各所に見られた。

先ず、 $1.5 \times 30 m$ のトレンチを2本設定し、掘り下げた結果、西側部分に2次堆積ロームが見られ、保存状態は良好であった。

西側部分の精査の結果、石組状遺構が見られ、この直上から諸磯期の土器片が数十片見られたが、遺構との関係を捉える事は出来なかった。

他の部分は、旧館の基礎にもかかり、又、他の条件での攪乱も激しく、見るべき遺構、遺物は検出されなかった。

約2週間に亘る3次調査も12月19日、全ての記録を済ませ無事終了する。 (増田逸朗)

II 遺跡の立地と環境

上ノ台遺跡は、埼玉県秩父郡長瀬町大字長瀬字上ノ台1418—2他地内に所在する。秩父鉄道上長瀬駅から約300mの地、現在の県立自然史博物館敷地内に存在し、眼下には景勝地長瀬を臨むことが出来る。

遺跡の立地は、荒川左岸河岸段丘上に位置し、標高148m前後を測る。

河岸段丘は、この附近では三段丘が見られ、荒川寄りに標高146mの第1段丘、本遺跡の乗る標高148mの第2段丘、そして、国道140号線が走る標高150mの第3段丘とに分かれている。

本遺跡縄文時代の集落は、第2段丘上に存し、隣接する北側の畠地や、下流方面に広く分布する事が確認されており、保存状態はともかく、大集落を形成する事が予想される。

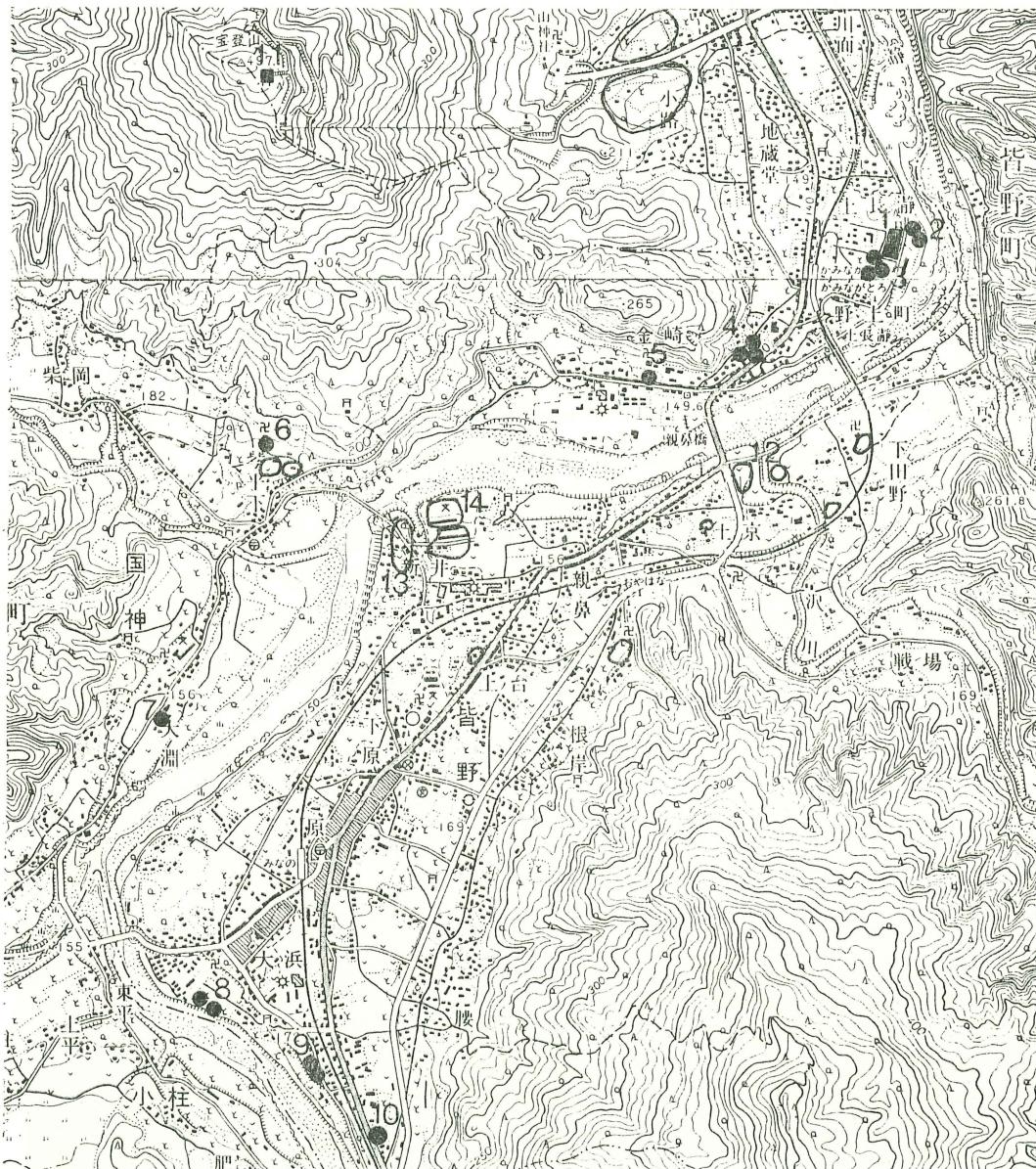
この様な段丘上の遺跡は、大なり小なり、その立地を選んで一面に存在する事が推定されるが、附近の尾根上にも縄文中期の集落は確認されており、特に、宝登山麓から、北方に連なる南面する尾根上には幾つか遺跡が確認されている。

1号墳に関する上長瀬古墳群は、敷地より町道を挟んだ南側隣接地に現在3基の円墳が存在する。その内の1基は、当古墳群中では比較的大形で、直径12m、高さ1.5mを測り、民家の庭先に保存されている。

この古墳の現状は、保存状態は良好で、墳丘には盛土に混じって河原石が見られるが、墳麓南側



第2図 遺跡周辺の風景（宝登山中腹より臨む）



第3図 遺跡の位置図

- | | | | |
|-----|--------|-------------|------------|
| 1 | 上ノ台遺跡 | 2~10 古 墳 | 11 祭祀遺跡 |
| 12 | 古墳時代集落 | ○ 繩文時代集落 | |
| 2、3 | 上長瀬古墳群 | 4 大塚1、2、3号墳 | 5 天神塚（冰雨塚） |
| 6 | 上ノ平古墳 | 7 大湊古墳 | 8 内手古墳 |
| 9 | 中之芝古墳 | 10 大塚古墳 | 13 駒形遺跡 |
| 14 | 大背戸遺跡 | | |

には対をなして片岩の玄門が見られ、おそらく、1号墳と同様、南に開口する横穴式石室である事が予想される。

他の二基も同様、同一敷地内に存するものであるが、大木が墳頂に繁っており、墳形をかなり変形させているものと見られ、規模は、本遺跡1号墳と同様であろうかと思われる。

又、第1段丘上、本遺跡東側に隣接して2基の円墳が見られる。これらは両者共に径5m程の墳丘で高さは50cm程を示し、かなり変形しているものと見られ、その内一基の墳丘中央には片岩の奥壁が一部露出しており、前者と同様、南面に開口する横穴式石室である事が推定される。

なお、第1段丘上に現在駐車場があるが、この造成の際、古墳らしき遺構を削平したとの話もあり、第1段丘上には3基以上の小円墳の存在が予想される。

遺跡北西約2kmには宝登山神社が鎮座している。社伝によると日本武尊が東国平定の際、宝登山山頂にひもろぎを立て、神武天皇、大山祇神、火産靈神の三柱を祭ったと伝えている。

この内の火防守護の神である火産靈命から、火を止めたので火止（ほど）山と名づけたとも言われている。又、一説には、慶雲5年秩父国からの和銅の献上は、周辺で採集された銅を鍛錬のため、銅鍛錬の火所（火床→金属鍛冶用の簡単な炉）を建てたもので、火所山→宝登山と呼ばれる様になったとも言われている。

これに加え、標高497mの宝登山には縄文時代集落や祭祀遺跡が知られている。

東面する山腹の参道に沿って、縄文前期、中期の土器片が多数検出されており、標高270m前後には、祭祀遺物が発見されている。

遺物は、手捏の小形壺形土器や高坏の破片が多数見られ、焼土もかなりの範囲から検出されている。

（増田逸朗）

参考文献

埼玉県教育委員会「古墳調査報告書第二編一秩父市及び秩父郡古墳調査」昭和32年

埼玉県教育委員会「埼玉県遺跡地図」昭和50年

埼玉県「埼玉県史」昭和26年

三友国五郎「円墳大塚古墳」埼玉県指定文化財調査報告書第二集 昭和38年

III 遺跡の概観

荒川左岸の河岸段丘上に存する本遺跡は、上長瀬古墳群内に存し、古墳ないし古墳址の発見が期待されたが、自然科学博物館や有隣クラブの建設時にかなり攪乱が及んでいたものと見られ、古墳一基の他、部分的に縄文前・中期の包含層が検出されたのみであった。

縄文時代の遺物散布は、今回の調査区西側と北側に広く見られ、調査時の附近の踏査では、隣接する桑畠や宅地内から加曾利E期の土器片や石斧が多量に表採できた。

おそらく、縄文時代の遺跡は今回の調査区を含め、北西側に広がるものと見られ、その範囲は $20,000m^2$ に及ぶものと考えられる。

遺構としては、第1次調査区西側端から古墳1基が検出されている。

この古墳は石室全長 $3.13m$ 、玄室幅 $1.07m$ を測る小形な胴張横穴式石室であるが、攪乱が棺床面まで及んでいたにもかかわらず、側壁は良く残り、石室平面プロポーションは完全なものであった。

1号墳に対しては、周溝を検出すべく4本のトレンチを設定したが、部分的には確認されてはいるが、おそらく石室側壁側のみに周溝を有する末期古墳とも考えられた。

前庭部は、道路敷下ではあったが、関係者の努力の結果かろうじて調査が実施され、遺構の細部が検出された。

第2次調査区では、時期不明の土壙と、溝状遺構が発見されている。

土壙は $4.2 \times 1.5m$ 程で、隋円形を呈し、1号溝は全掘されなかつたが、短辺 $1.4m$ の浅い長方形遺構で、内部から須恵器蓋が出土しており、古墳との関連も否定することは出来ない。

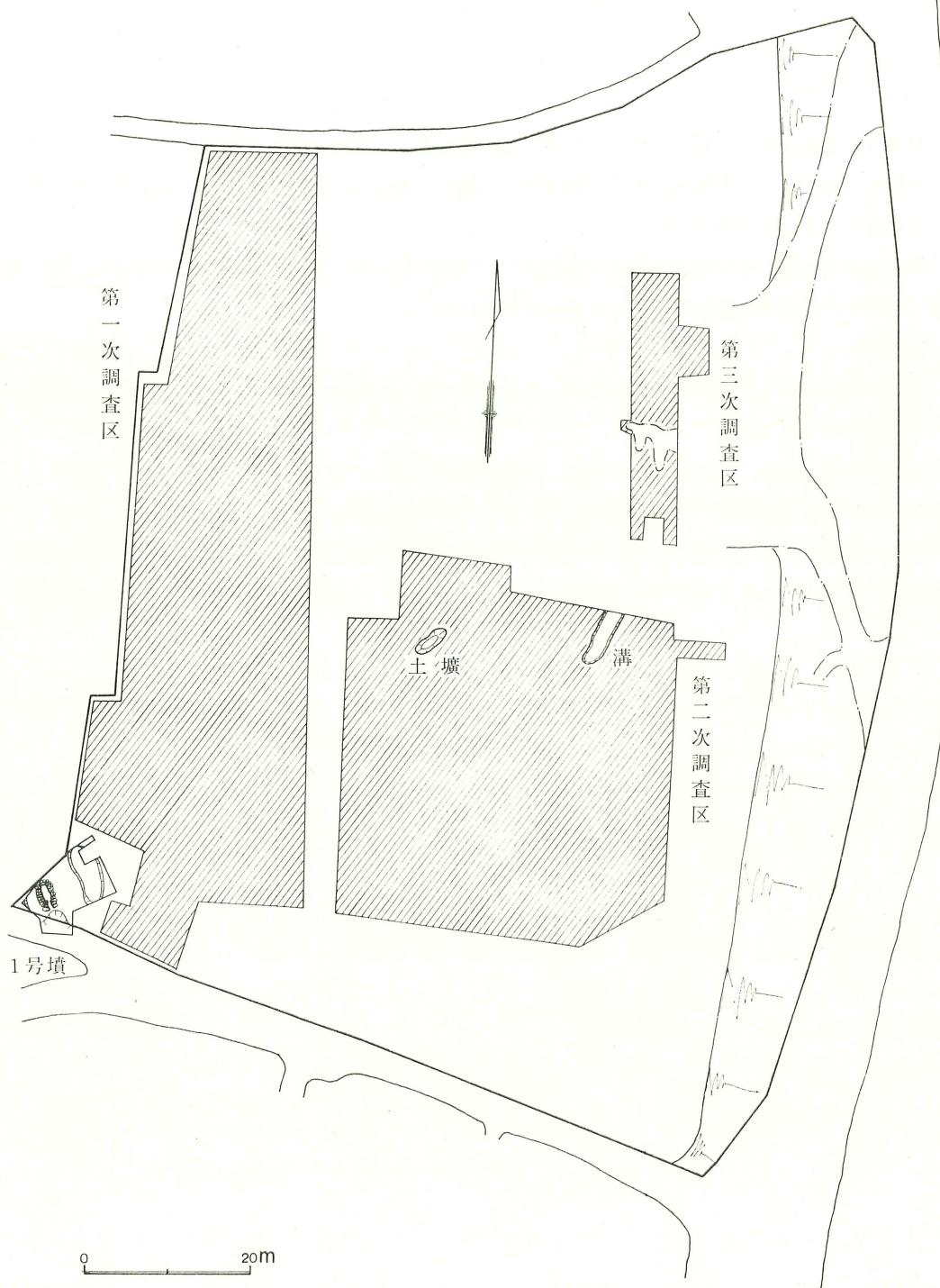
第3次調査では石組状遺構が見られたが、遺物との関連や規則性が捉えられず、ここでは一応、諸磯期の縄文土器との関係は不明瞭であった。

以上、県立自然史博物館敷地内の調査の概要であるが、1基の古墳の発見は敷地内端であり、おそらく、有隣クラブや自然科学博物館建設時にかなり旧地形を削平したものと見られ、上長瀬古墳は末期古墳群であり、周溝は浅いため、当時の削平で古墳址さえも残らない状況も考えられる。

縄文時代の遺構は、基盤砂利層が波打っており、部分的に2次堆積ロームが見られ、ここから土器片は検出されたものである。

該期も、畑地耕作や建物で大部分は削平され、原位置の遺物は少なかったものと見られる。

保存状態の悪い調査区内ではあったが、附近の古墳群の様相や、縄文土器の散布から、一応かつては古墳群や、縄文時代の集落の一端が形成されていたものと考えられる。 (増田逸朗)



第4図 調査区全体図

IV 遺構と出土遺物

(1) 1 号 墳

遺構は、調査区端に位置し、接して町道、敷地境となり、調査は極めてやりにくかった。

古墳附近は、古くから荒地と化し、雑木が生い繁り、墳丘中にも径30cm程の大木が生えていて、この伐採に大きな人力を要した。

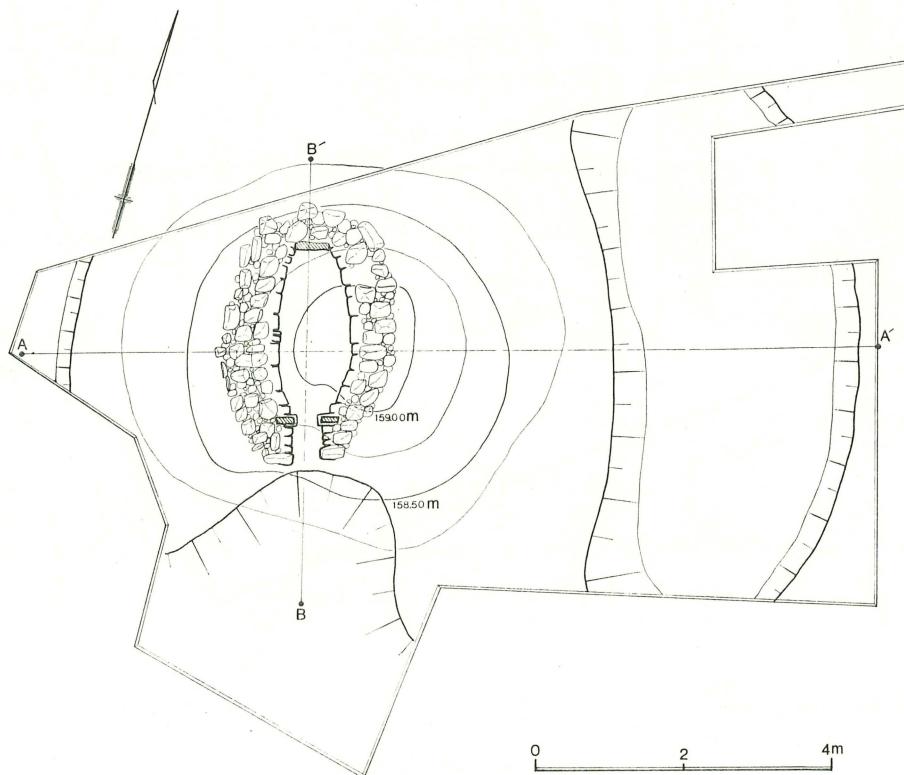
墳丘清掃の結果、墳丘面には河原石が散乱し、墳丘はかなり荒れている事が予想され、又、奥壁、玄門柱の両立石が露出している状況が明らかになった。

墳丘

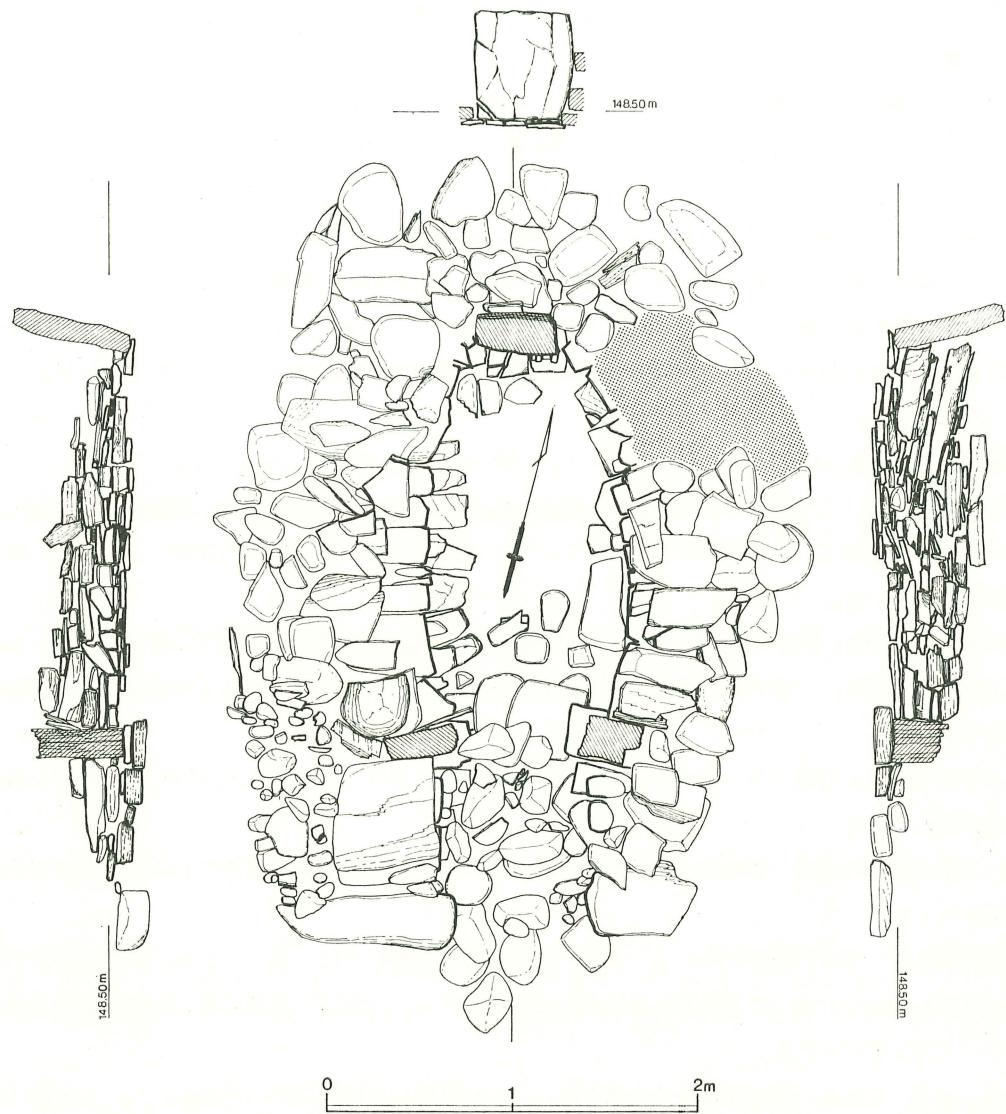
附近の地表面から高さ約58cmを測るが、径30cm程の転石が露出しており、正確な高さは部分によってまちまちであった。

見かけの墳丘径は、一辺5.10mを測り、小形な部類に属し、表土下の盛土は礫混りの褐色土で、おそらく基盤2次堆積ロームを礫と共に盛ったものと予想される。

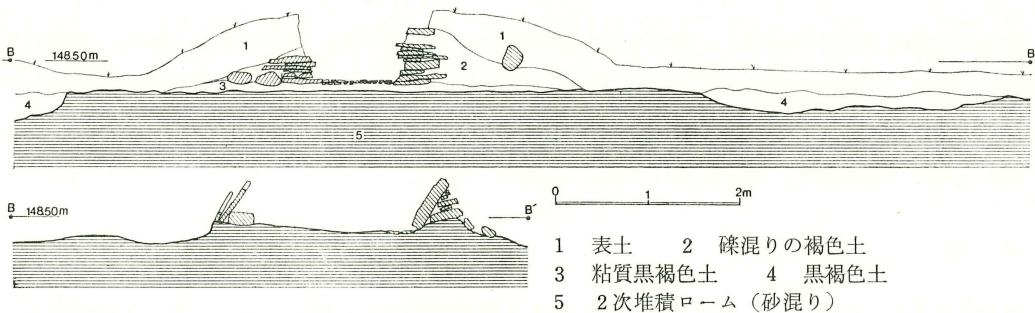
石室下、並びに墳丘下には、厚さ7~10cm程の粘質な黒褐色土層が一面に見られ、古墳構築時に基盤2次堆積ロームまで当時の表土を含め、水平に削平して一様にならし、この粘質土を敷き詰め



第5図 1号墳全測図



第6図 石室実測図



第7図 墳丘及び石室断面図

た事が予想され、小形墳ながら丁寧な手順を追っている事が確認された。

周 溝

東側では幅3.30mを測るが、西側では幅は不明である。

周溝の深さは東側でやや浅く、基盤を約20cm程掘り窪め、西側ではやや深く、30cm以上を測る。

周溝内覆土はいずれも黒褐色土が見られ、前庭部の覆土とも共通した色調を呈していた。

石室後方部の調査では周溝は確認されず、本墳の周溝形態は、側壁側のみに半円状に見られるもので、比較的不規則なプランを呈すものと考えられ、末期群集墳の特徴を良く示している。

以上の墳丘周溝の形態から古墳を復元すると、墳丘径5~6mで、裾部に1m程のフラットな面を残し、ここから周溝に至り、内径7~8m、外径13~14mの規模を示すものと考えられる。

石 室

石室は、全長3.13mを測り、主軸はN-15°-Wを示す胴張横穴式石室である。

各所の規模は、奥壁幅45cm、高さ62cm、玄室中央最大幅107cm、玄室長194cm、羨道幅80cmを測る。

石室側壁の構造は、厚さ5cmの片岩を根石とし、側壁より20cm程玄室内に伸ばし、この上に側壁を積み上げている。

側壁の大部分は、片岩を用い、玄室側は面を整え、この際、出た残片を棺床面に敷き詰めている。

羨道部の側壁は、小量の片岩に、河原石の転石を用い、特に羨門石は長さ1mを測る大形品を使用している。

側壁外の後込め石は径30~40cm程の転石を等間隔に敷き並べ、この間に小形の転石や片岩を乱雑に詰め込んでいる。

羨道部の封鎖石は20~30cm程の転石を雜に詰め込み、玄門部は2個の転石の上に片岩を立てかけて閉塞石としている。

側壁高に関しては、攪乱が激しく、勿論、天井石等は残存してはいなかったが、奥壁の高さが62cm程を測る事からこの上に天井石を載せたものと考えられ、比較的天井部の低い末期的様相を呈する小形石室と考えられる。

尚、石室、前庭部の調査は細心の注意を払い、これに当ったが、副葬品の鉄器、玉、土器等は皆無であった。

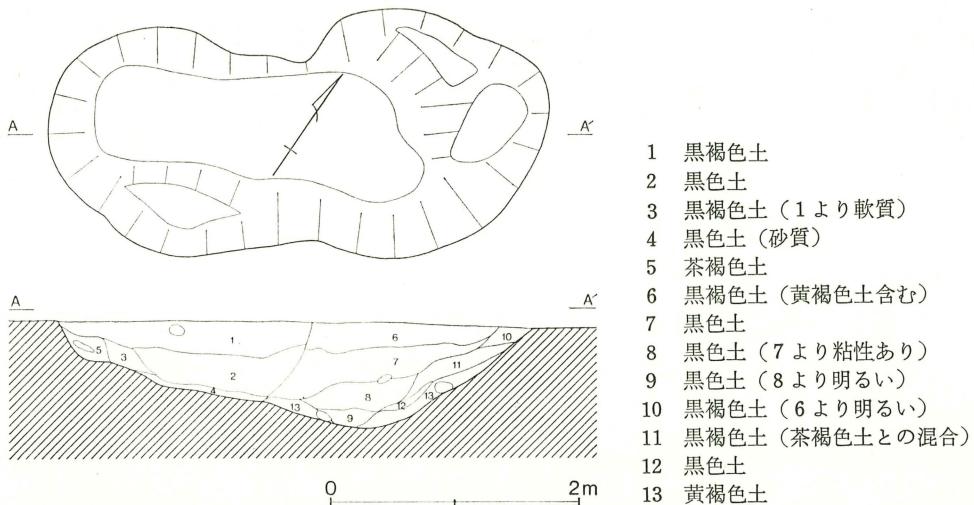
(増田逸朗)

(2) 土 壤

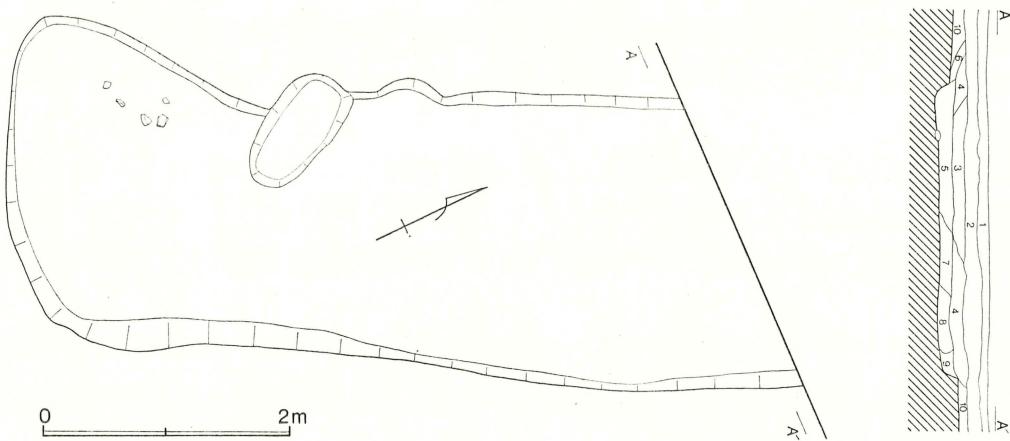
調査区の北西部隅に位置する。長さ4.0m、幅2.0m、深さ80cmで、双円形をしており、土壙が2基切り合い南東のものが新しく思われるがはっきりは観察できない。覆土は黒褐色土、茶褐色土であり、粘性が強く、底部は特に粘性の強い黒色土であった。底面は北西側の方が40cmほど深くなっている。遺物は出土せず、時期性格は不明である。

(3) 溝

調査区北東隅に位置する。幅2.2m、長さ6mで溝状のプランを呈している。深さは20cm程であり、底部は礫面が表われ、ほぼ水平である。遺構は、北側の調査区域外にのびている。覆土は黒色



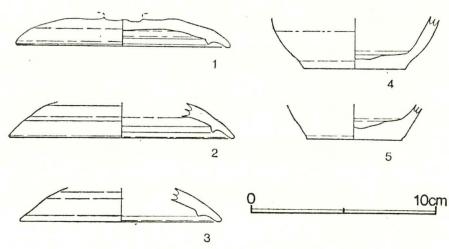
第8図 土 壤 実 測 図



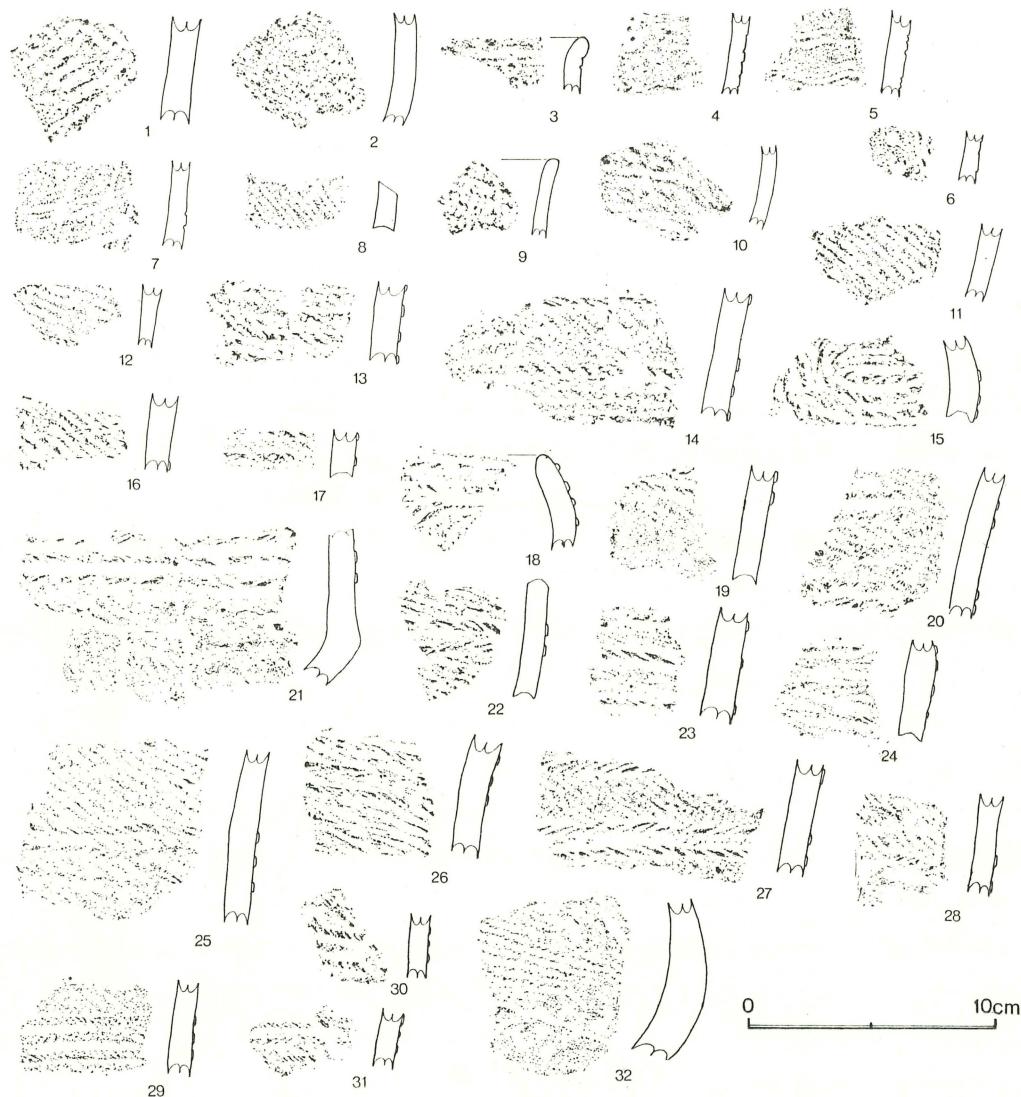
第9図 溝 実 測 図

- | | | |
|--------|------------------|----------------|
| 1 暗褐色土 | 5 黒色土（3より黒味強し） | 9 黒褐色土 |
| 2 茶褐色土 | 6 黒褐色土（4よりくらい） | 10 茶褐色土（白砂粒含む） |
| 3 黒色土 | 7 黒褐色土（黄褐色土多く含む） | |
| 4 黑褐色土 | 8 茶褐色土（黄褐色土を混合） | |

土、黒褐色土である。遺物は南側の先端部西側に須恵器の蓋と壺の底部破片、土師器の小破片が小量出土している。又西壁の先端より2mのところに隋円で深さ30cmの攪乱がみられる。須恵器蓋はかえりのあるもので、7世紀後半のものであり、遺構はこの時期のものであろう。性格は不明である。



第10図 溝出土須恵器



第11図 繩文土器

(4) 溝出土須恵器

蓋 (1、2、3)

1は径10.6cmを測り、ツマミが欠落している。肩部の立ち上がりがゆるやかで天井部は水平を成し、内部に反りを有する。剥落部の径は大きく、小形宝珠にはならないものと見られる。焼成は均一で、色調は暗灰色を示す。残存率50%。

2、3は残存率20%程の小片で器形の詳細は定かでないが、肩部立ち上がりが前者に比して急な感じを受ける。

底 部 (4、5)

底径5.5cmを測り、両者共に所謂ヘラ切り技法が見られる。4は蓋と同様暗灰色を示すが、5は

焼が悪く、灰白色を呈する。

(5) 繩文土器

土器は2次調査、3次調査で出土している。2次調査では、調査区の西側と北側で石器とともに出土した。2次調査では、竹管文土器が、3次調査では、浮線文土器が出土している。2~12が2次調査、1、13~32が3次調査出土である。以下、土器を説明する。

1は纖維を混入した単節の羽状縄文土器である。R Lを縦横に回転している。器面はやや外反している。表面は黒褐色、暗褐色、内面は茶褐色で、砂粒を含む。2は纖維を混入した縄文R Lの土器である。節は比較的小さい。両面とも黒褐色と茶褐色。砂粒を含む。

3~5は同一個体である。3は口縁部破片で口唇部は肥厚し外側に突出しており、丸味を帯びている。口唇直下に櫛描文が横走し、沈線上に円形竹管文が押捺される。4は、3本単位の櫛描状波状文が横走し、その上に円形竹管文が縦に3個並んで押捺されている。5は4と同一の櫛描波状文が2本施文されている。3~5は地文なしで、色調は両面とも黒褐色、茶褐色である。6は円形竹管文が縦に2個並び、その横に縦に沈線が施文されている。円形竹管は丸形に刺突されている。両面褐色でややもろい。7は斜行する平行沈線で格子目状の文様が施される。黄茶褐色を呈し、胎土はややもろく、砂粒を多量に含む。

8は細緻な縄文R Lである。輪積み痕がみられる。両面茶褐色。9は口縁部破片であり、薄手である。R Lで節は丸味がありはっきりした施文である。両面暗茶褐色。10はR Lで細長い節になっているが、原体の撫りがゆるいものと思われる。薄手である。表面茶褐色、内面黒色、茶褐色。11の節は10のものより小さい。表面茶褐色、褐色、内面茶褐色。胎土に小石を含む。12も節は小さい。表面黒褐色、茶褐色。焼成やや良好。

13、14、16、17は縄文R Lの横位回転を地文として浮線が横位に貼付される。4点は同一個体である。13は浮線4本が貼付される。浮線は幅4mmで、浮線上には4本ともR Lが横位回転されている。ただし、原体は地文のものと同一ではない。胎土に含有物は少なく、極めてもろく脆弱である。表面褐色、内面暗褐色。14は浮線4本が貼付されるが、離れた1本は刻みが施され、まとまつた3本は縄文が施文されている。この3本の浮線の色調は、地文の褐色に比して白味が加っている。地文にわずか綾絡文がみられる。表面褐色、内面暗褐色。

15、18~28は浮線が貼付され、浮線上にヘラ状工具による粗い刻みが施されている。15、18は同一個体で連続する部位のものと考えられる。

18は口縁部破片で、ゆるく内彎しており15の部分と合わせてキャリバー形土器の口縁部となるものであろう。18は口唇部より3本の浮線が貼付され、3本目の浮線から浮線が2本枝分れし曲線を描いている。この2本が、モチーフとしては15の左端部の浮線の曲線に続くものと思われる。口縁部文様帶のモチーフの一つになろう。15、18の浮線上に施された刻みの方向は矢羽根状であるが15の曲線部では同一浮線上の刻みの方向が曲線のコーナーで変わり、互いに同一方向を示すものが見られる。

21は胴下半部で屈曲する土器の破片である。3本の浮線と屈曲部の上に一本浮線文がみられる。

地文はなし。器形は屈曲しそのまま底部へつながり、底径の小さなものとなろう。表面褐色、内面暗褐色。ややもろい。

19~31は浮線が横走する。RLを地文とする。19の刻みは一部浮線からとびだしている。表面褐色、内面暗褐色。20は浮線が2本1单位である。浮線は4mm幅あまり隆起していない。両面白味のある茶褐色。胎土はしまっている。22は表面茶褐色、内面暗褐色である。浮線は厚く隆起し、刻みははっきりしている。23は両面黒褐色である。浮線はそれぞれ離れた3本がみられる。胎土、焼成は比較的良好である。24は上端に縦の浮線がわずかにみられる。ただし浮線には何の施文もなされていない。下の2本は刻みが施される。25は3本浮線がみられる。表面暗褐色、内面褐色である。胎土はややもろい。26は地文はRLで押捺が深く粘土が盛り上っている。浮線は3本みられる。表面黒褐色、内面暗褐色、胎土やや良好。27は地文RLで、浮線が1本、2本と貼付される。繩文と浮線上の刻みは、ともに明瞭に施文されている。両面とも褐色で、焼成は比較的良好。28は浮線が2本、貼付される。29~31は、先の浮線文土器よりも薄手で、浮線上の刻みが細かく施される。同一個体と思われるが、29、31はRLの地文があり、30は見られない。刻みは矢羽根状である。32は上半がRLで、下半は無文である。下半は肥厚し13mmあり、内彎している。

1、2は黒浜式、3~12は諸磯a式、13~32は諸磯b式である。

(6) 石 器

1、2次調査で石器を採集し得た。2次調査では調査区より石器を採集した。しかし、1次調査では、表面採集によるもののみであり、調査区と調査区に隣接した区域からのものである。表採品には大形石斧が多く20cmほどの長さのものが5点ほど含まれている。石器は26点を図化した。このうち25点が打製石斧であり、1点が敲台である。他に剥片が数点出土している。なお、1~11が2次調査区出土、12~26が表採品である。

打製石斧は、大形のものと小形のものがある。器形はいわゆる短冊形、撥形、分銅形、その他に分けられる。それぞれI形、II形、III形、IV形とする。I、IIは更に分類される。

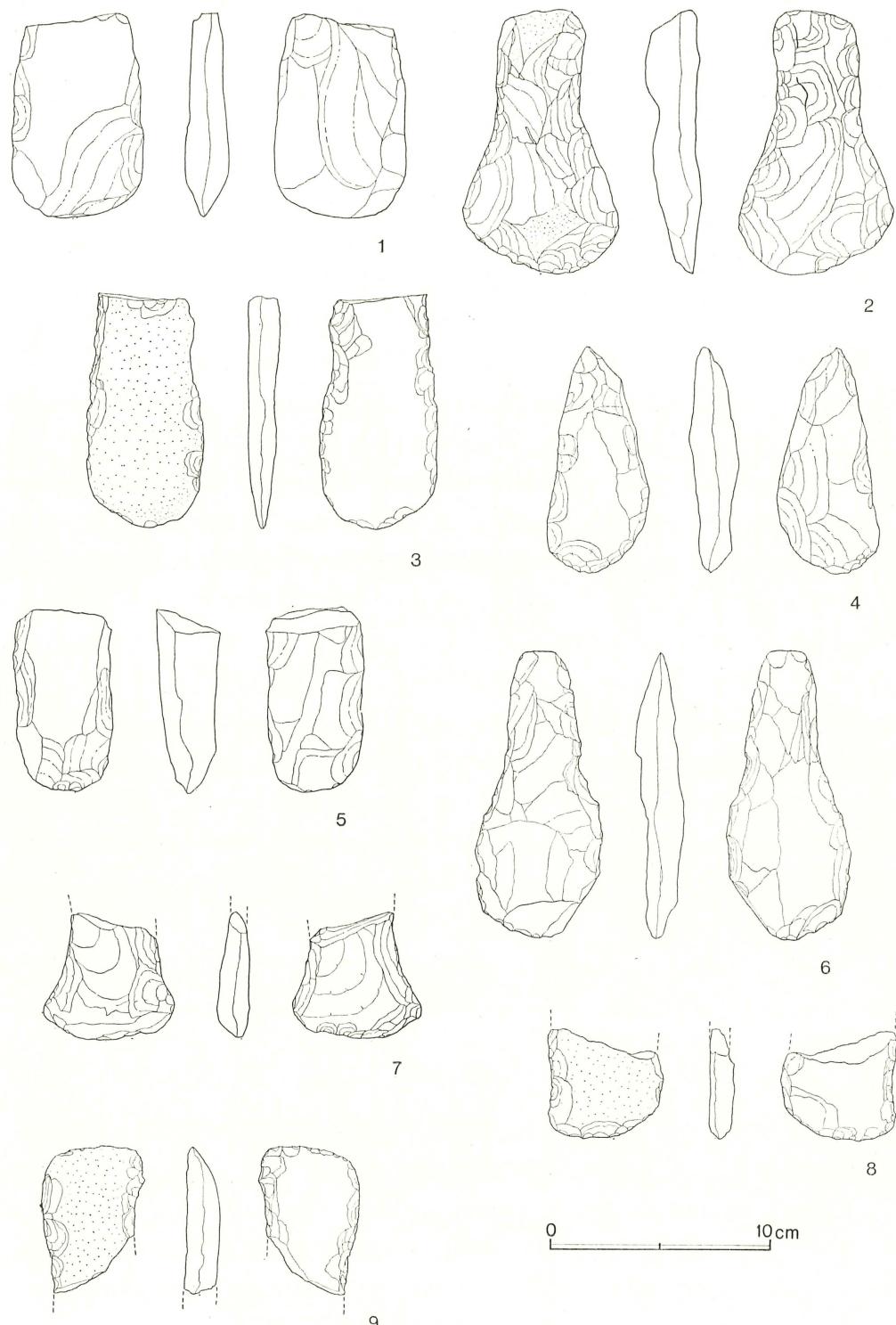
I形 a；小形石器、b；大形の石器でやや頭部の幅が刃部より狭いもの。II形 a；丸刃で脣部に抉りのあるもの。b；非対称の丸刃をもつもの。c；直刃だが端部に丸味のあるもの。以下、各石器を説明する。

打製石斧

<1> II c形。頭部が欠失している。I a形になるかもしれない。両面とも両側辺に成形剥離とわずかに調整剥離がみられる。刃部は片面のみ調整剥離がみられる。片岩のため、ステップ状剥離が多い。長さ8.8cm、幅6.0cm、厚さ2.0cm、網雲母片岩。

<2> II a形。表裏ともに成形剥離が丹念になされ。主要剥離面を殆んど残さない。表面は頭部、刃部に自然面を残し、頭部はやや部厚い。この厚みをはがし、器形調整するため成形剥離がよくされている。表面の左側辺の表裏と刃部の表面に調整剥離が丹念になされている。刃部はやや非対称の丸刃である。長さ11.9cm、幅6.9cm、厚さ2.4cm。粗粒硬砂岩。

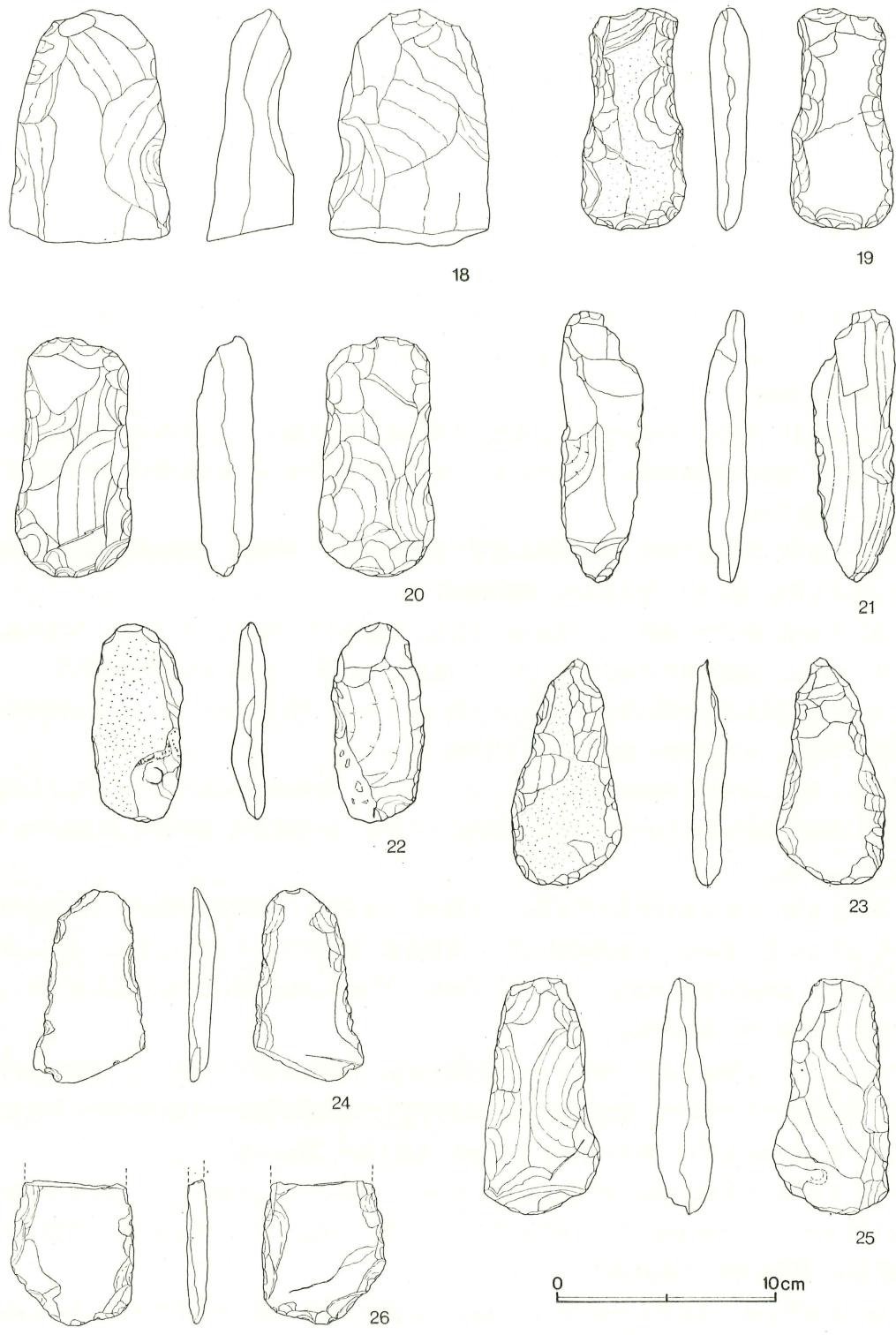
<3> II a形。頭部をわずかに欠失する。表面は自然面を大きく残し、調整剥離が一部に、裏面は



第12図 石 器



第13図 石 器



第14図 石器

両側辺と刃部のわずかになされ、主要剥離面を大きく残す。薄手である。長さ10.3cm、幅5.3cm、厚さ1.4cm。粗粒硬砂岩。

<4> II b形。成形剥離は大きくなされている。調整剥離は刃部で丹念である。肩部を若干欠失している。刃部は非対称の丸刃である。長さ10.1cm、幅4.4cm、厚さ2.1cm。粗粒硬砂岩。

<5> I a形。幅が狭く部厚い石器である。胴上半部を欠失する。片面は成形剥離が一部中央で重なりあう。片面では主要剥離によるフラットな面が残され、成形剥離とわずかに調整剥離がみられる。抉りはなく丸刃で刃部と胴部の幅は同じである。長さ8.0cm、幅4.3cm、厚さ2.9cm、ホルンフェルス。

<6> II a形。両面とも成形剥離がよくなされ、中央で重なり合う。調整剥離は両側辺、刃部によく見られる。刃部は端部を欠失している。頭部は刃部に比してかなり狭い。長さ13.0cm、幅5.8cm、厚さ1.9cm。緑色岩。

<7> II c形。刃部のみの残存である。表面は成形剥離、調整剥離をなし、裏面は主要剥離面を大きく残し、刃部には調整剥離がよくみられる。刃部はやや丸味がある。長さ5.6cm、幅6.0cm、厚さ1.5cm。緑色片岩。

<8> II b形。刃部のみ残存する。表面に扁平な自然面を残す。両側辺、刃部に調整剥離がみられる。長さ4.7cm、幅5.0cm、厚さ1.1cm。粗粒硬砂岩。

<9> II a形。頭部のみ残存する。表面は自然面を、裏面は主要剥離面を大きく残す。刃部は裏面のみ、両側辺は両面に調整剥離がみられる。長さ6.2cm、幅4.5cm、厚さ1.5cm。粗粒硬砂岩。

<10> III形。両面とも成形剥離がよくみられ、抉り部と刃部に調整剥離がみられる。両刃はやや非対称形である。長さ13.9cm、幅9.6cm、厚さ2.3cm。ホルンフェルス。

<12> I b形。わずかに頭部が刃部より狭くなっているが、両側辺は直線的である。両面とも成形剥離、調整剥離はよくみられる。側面は弓状になっている。長さ19.8cm、幅8.5cm、厚さ3.7cm。ホルンフェルス。

<13> I b形。表面は自然面を大きく残し、左側辺に成形剥離が、両側辺と刃部にわずか調整剥離がなされている。裏面は、主要剥離面を残し、成形剥離、調整剥離が丹念になされている。左側辺は屈曲し、右側辺は直線で頭部は刃部よりやや狭い。側面はほぼ直線的である。長さ17.8cm、幅8.4cm、厚さ2.5cm。粗粒硬砂岩。

<14> II a形。頭部は先端を一部欠失し、肩の部分が抉られ頭部は狭くなっている。表面は成形剥離、調整剥離が丹念である。裏面は成形剥離が左側辺と頭部に調整剥離が刃部と側辺の一部に見られる。胴上位が最も厚い。長さ1.63cm、幅7.1cm、厚さ3.6cm。滑石片岩。

<15> II c形。自然面を頭部に残す。左側辺は内曲し、右側辺はほぼ直線である。成形剥離は両面とも丹念であり、調整剥離は表面に僅かにみられる。胴下半はとりわけ厚味がある。長さ19.0cm、幅8.8cm、厚さ3.9cm。粗粒硬砂岩。

<16> II c形。表面は頭部と刃部にわずかに自然面が残る。成形剥離は胴上半で丹念である。調整剥離は表面に丹念である。側面はS字状をなす。長さ17.7cm、幅3.3cm、厚さ2.6cm。粗粒硬砂岩。

<17> III形。両刃が欠失している。表面は自然面を大きく残し、内面とも抉り部に成形、調整剥離

がなされている。裏面は主要剥離面を大きく残し、片刃に成形剥離がみられる。長さ 15.5cm、幅 12.1cm、厚さ 2.8cm。蛇紋岩。

<18> I b 形。胴下半を欠失し II 形になるかもしれない。頭部は丸味をもつ。成形剥離がよくなされ、調整剥離はわずかである。長さ 10.7cm、幅 7.3cm、厚さ 3.8cm。ホルンフェルス。

<19> II c 形。表面は自然面を残す。胴上半に抉りが見られ、成形剥離がなされ、両面とも全辺にわたり調整剥離が丹念である。長さ 10.1cm、幅 4.8cm、厚さ 1.8cm。粗粒硬砂岩。

<20> I a 形。厚味のある石斧であり、ずんどう形である。成形、調整剥離が丹念である。刃部は丸味をもつ。長さ 11.0cm、幅 5.3cm、厚さ 2.6cm。ホルンフェルス。

<21> IV 形。形は細長く刃部は尖っている。やや厚い剥片を素材とする。調整剥離は一部になされる。刃部はやや鈍い。長さ 12.4cm、幅 3.7cm、厚さ 1.9cm。硬質頁岩。

<22> I a 形。小形状をなし頭部、刃部とも丸味をもつ。表面は自然面を大きく残す。円礫の剥片を素材とし、表面は球面状である。表面は右側辺に成形剥離、調整剥離が、左側は調整剥離がわずかにみられる。裏面は主要剥離面を大きく残している。こじんまりとした石斧である。長さ 9.1cm、幅 4.1cm、厚さ 1.4cm。硬質頁岩。

<23> II b 形。表面は自然面を残す。頭部は尖っている。両面とも調整剥離が丹念である。長さ 10.1cm、幅 5.0cm、厚さ 1.5cm。粗粒硬砂岩。

<24> II c 形。刃部を欠失する。扁平であり、両側辺と小さな成形、調整剥離がみられる。片側はやや内曲するが、他は直線であり頭部は刃部に比して狭い。長さ 8.4cm、幅 4.9cm、厚さ 1.2cm。ホルンフェルス。

<25> II a 形。やや非対称の刃部を持つ。刃部に近くなり厚味を増す。表面は成形剥離が大きい。裏面は主要剥離面を残す。長さ 10.8cm、幅 5.3cm、厚さ 2.5cm。ホルンフェルス。

<26> II b 形。刃部は丸刃というより屈曲し、非対称である。胴上半部を欠失するが II 形になるであろう。成形剥離、調整剥離、が比較的丹念である。ステップ状剥離が多い。長さ 6.4cm、幅 5.6cm、厚さ 0.9cm。粘板岩。

敲 台

<11> 皿状の凹みを持たないが石皿としての機能も果したであろう。片面は扁平でよく擦れていな
い。厚さ 4.9cm。中粒砂岩。 (曾根原裕明)

尚、石質鑑定は本間岳史氏による。

V ま と め

(1) 上ノ台 1号墳と秩父の古墳

秩父の古墳概観（註1）

四方を1,000m級の山塊で抱かれた秩父盆地は、中央を荒川が貫通しており、その支流である中小河川により谷筋が延び、盆地以外にも各所に小平野を形成している。

しかし、何といっても、荒川両岸に形成された皆野町、秩父市の位置する河岸段丘が最も広く、以下に述べる古墳群は大部分ここに分布することが早くから知られている。

荒川流域の古墳群としては、下流から宝登山周辺に上長瀬、金崎、国神古墳群が見られる。

これよりさらに上流、皆野町荒川右岸に、大塚古墳を含めた皆野古墳群、和銅遺跡の対岸には秩父盆地で最も大きい飯塚・招木古墳群が存在する。

秩父市内には金室古墳群が、そしてさらに武州日野あたりまで、点々と小円墳が分布している。

支流赤平川上流では、上太田、取方、信濃石古墳群が、さらに支流横瀬川の左岸段丘上には、秩父市大野原古墳群が見られる。そして県境吉田町には大田部塚山古墳群が特異な立地を示し、上野と対峙している。

以下、主な古墳群ごとにその立地と分布状況をおさえ、現在までの知見を交え検討してみたい。

まず、上長瀬古墳群については後に詳細に述べる事とし、宝登山南麓に位置する金崎古墳群（註2）から記してみると、現在、天神塚（氷雨塚）、大塚1～3号墳から成り、3基が開口している。

この内の天神塚は、墳丘径10～12mを測る円墳と見られ、奥壁幅1.15m、石室全長6mを測る短冊型石室で、側壁には片岩を用いており、いかにも古式の石室形態を示す。さらに墳麓周辺からは円筒、形象埴輪が表採されている。

隣接する大塚3号墳は、胴張の両袖型石室で、羨道は一部不明であるが、玄室は完存している。

側壁の石は前者と同様片岩を用いてはいるが、天井部は高く、かなり持送っている。

以上の諸事実から少なくとも、石室形態に於ては、大塚3号墳は後出的要素を含み、金崎古墳群中での被葬者の系譜は、前者との間に多少の時間差は認められようが、天神塚古墳から大塚3号墳の流れを追う事ができる。

大石室大塚古墳（註3）の周辺には、内手、中之芝古墳が存在し、一応大字名を取り、皆野古墳群と呼称しておく。

皆野大塚は、径18m、高さ5mの円墳と見られ、石室はやや胴の張る、片袖ないし両袖型石室と考えられている。石室全長10.35m、奥壁幅2.90m、玄室長5.00m、玄室最大幅3.22mを測り、天井は巨石7枚で被われている。

この古墳に関しては、天明年間に既に開口していた事が「秩父志」に記載されており、副葬品等は不明であるが、筆者の踏査時も埴輪等も見られず、前述する石室プランからすれば、7世紀前半でも後葉に位置づけられるものと考えられる。

当古墳群と荒川を挟んで大淵氷雨塚古墳（註4）が存在する。県古墳調査報告書では片袖型石室としているが不自然で、おそらく短冊か、両袖型石室と見られる。

当古墳は、石室のみが残存し、墳形は不明であり、周辺からは埴輪片は表採されていない。

まず、特徴としては巨石の硅岩の転石を使用している事で、その大きさは径2mを測り、奥壁は2段に、側壁も1段ないし2段に乱石積みを施している。

玄室の幅は1.78m、高さ1.80mを測り、完存していたら、秩父最大級の石室と推定される。

荒川から横瀬川が分岐する地点に多くの古墳群が見られる。

荒川左岸には、郡内最大級の飯塚・招木古墳群（註5）が存し、現在124基が県指定になっている。古墳群の構成は、小さな谷を挟み二群に分かれ、この中もさらに支群を形成するものと見られる。

発掘調査の少ない現在の知見では、これらは全て円墳で、全体の35%に葺石が見られ、主体部は横穴式石室と考えられている。

この内、32号墳は、両袖型の横穴式石室で、奥壁は板石を三枚用い、間隙に板石、河原石を充たし、側壁は、板石、河原石を用い持送っている。

他に、昭和53年に6基の円墳が調査され、無袖型横穴式石室が確認されている。さらに、奥壁までも河原石で積み上げる手法もあり、石室形態、構築方法も種々見られ、今後の調査が期待される。

いずれにしろ、当古墳群の年代は、埴輪消滅後、7世紀中葉を中心に大部分が構築されたであろう事は、群構成、墳形、石室形態からいっても異論あるまい。

金室古墳群（註6）は、荒川右岸の河岸段丘上に存在し、現在、8基の円墳が見られる。

昭和31年に発掘された古墳は、河原石の横穴式石室で、玄室部の後に外護列石が囲繞していた。

さらに、明治19年にこの古墳群の一古墳からは、滑石臼玉、玻璃小玉、瑪瑙勾玉、紡錘車、鉄鏃、堅矧広板鉄留衝角付冑、金銅責、鐸、刀子、須恵器片が発見されている。この冑に対して村井嵐雄氏（註7）は、「関東では6世紀後半から7世紀にわたってもっぱら用いられた」としている。おそらく、金銅責の出土等から7世紀前半の構築と考えられる。

支流赤平川沿いでは取方古墳群が存し、現在5基確認されているが、築造年代は不明である。

発掘例としては、昭和49年調査された下流の安中1号墳がある。

古墳は径10m、高さ1.2m程の円墳で、主体部はやや胴張の無袖型横穴式石室を呈する。石質は第三紀の「吉田層」と呼ばれる砂岩の割石である。

副葬品は盗掘に会い皆無であったが、石室の形態から、7世紀後半に構築されたものと思われる。

横瀬川の左岸段丘上には大野原古墳群（註8）が存在する。昭和32年県古墳調査時には、原谷、大野原地区に古墳址も含めて80数基が確認されている。

ここからは、かって径4m、高さ1mの円墳が発掘され、箱式石棺らしい主体部から、全長44.8cmを測る蕨手刀（註9）、直刀、鉄鏃、鐸が発見され、これに加え、和銅古錢も出土したと云う。

又、昭和30年に原谷1号、4号墳（註10）が発掘され、半地下式横穴式石室が発見されている。

石室は、南に開口し、全長4.5mを測り、砂岩と緑泥片岩を用いている。

おそらく、蕨手刀出土古墳や、半地下式石室の構築方法を加味すると、当大野原古墳群も、7世紀終末には古墳の築造を終えた事が推測される。

群馬県と面する吉田町は、神流川右岸に存し、ここ標高950mの塚山中腹（850m）に太田部塚山古墳群（註11）が存在する。

古墳は総数19基を数え、内1基は全長13mの前方後円墳とも考えられている。

遺跡の立地する眼下には神流川を臨み、秩父への古道とも考えられるが、赤平川流域に古式の古墳が存在する事は確認されていない。

いずれにしろ、東国広しと云えども、標高850mを測る古墳群は他に類を見ないものである。

古墳群成立の要因として、付近に露頭する石材との関係が推測されなくはないが、主体部、副葬品が不明な今日、その性格に迫る手だけでは無い。

上長瀬古墳群と上ノ台1号墳

上長瀬古墳群は、現在1号墳を含めて6基を数える事が出来る。又、第2次調査区の溝をその出土須恵器の年代と遺構の構造から古墳の周溝とする事も、あながち無理ないものとも考えられる。

溝を周溝として認めた場合、荒川左岸第1段丘上の2基と、付近の古墳として図版に載せた古墳との間を、この溝の分布で詰める事も出来る。

おそらく、今回の調査区内にも数基の古墳が存在したが、周溝が浅いためと、建物構築時に何らかの形で削平破壊された事は、調査時の覆土を見ても明らかである。

これに加え、調査時に明らかに埴輪と思われる細片も出土しており、当上長瀬古墳群中にも少量の埴輪を樹立していた古墳が存在していた事が予想される。少なくとも10数基の古墳でもって群構成をしていたものであろう。

1号墳は、その年代を推定できる副葬品が皆無であった。しかし、周溝は一周せず、両側壁側のみに掘削され、外縁が不整形で、深さも一定しない特徴を有する。そして、石室の形態は、胴が張り、羨道が短かく、奥壁は片岩の一枚板である。

石室のプランからすれば、塚本山7号墳（註12）、鹿島34号墳（註13）に類似し、いずれも7世紀後半に位置づけられているものである。又、周溝のプランも7世紀代小円墳になると、一周すること無く不整形であるのが一般的で、1号墳の年代はこれとも矛盾するものではない。

終末期古墳の羨道に関しては、曾て箱崎古墳群（註14）で注目した事があるが、墳丘が小規模ながら、玄室の長さは遺体を埋葬するためには一定の長さを必要とするため、羨道が短かくなり、この結果、玄門が墳麓近くに来てしまう。

そのため、玄門柱は應々にして墳丘から露出してしまう現象が、鹿島、塚本山、箱崎古墳等には確認されている。

本古墳群中でも、写真図版に示した付近の古墳の玄門も、同様な現象とも受け取れる。

上長瀬古墳群の現存する古墳は、踏査の結果、埴輪も見られず、写真に示した玄門の露出する現象から、1号墳と相前後する時期に構築されたものと推定される。

しかし、前述する様に、調査時には埴輪片も採集しており、当古墳群中にも、7世紀初頭に位置

する古墳が存在していた事は十分予想される。おそらく、現在の行政区画は異なるが、隣接する金崎古墳群と連続する事が、編年的には可能である。

ちなみに、大堺3号墳の石室形態を、児玉地方の南塚原7号墳（註15）に近い形態とし、7世紀初頭に位置づけ、この後に大堺のいずれかの石室を当て、そして、上長瀬古墳群中の消滅した埴輪を持つ古墳へと変遷をたどれば、7世紀第1四半期までは編年的に追う事が出来る。これに加え、消滅した金崎寄りの本古墳群中のいくつかを第2四半期に想定出来れば、7世紀後半にスムーズに連続する事に成り得る。

一応、多くの推論を交え、上長瀬古墳群の成立を追ってみたが、本来的には、本古墳群は、隣接する金崎古墳群と一体を成す群集墳として捉える事が出来る。

秩父の古墳の年代

古墳の年代を決定するものとして、主体部の構造、副葬品、墳形がある。

副葬品は比較的伝世、追葬の可能性があり、資料的には扱いにくい。しかし、墳丘上に樹立する埴輪に関してはこの限りでは無く、一応、北武藏では7世紀第1四半期まで残存するものと理解されている。

埴輪の出土している古墳群としては、金崎古墳群、長瀬町下小川、矢那瀬が知られている。

これらの傾向を見ると、長瀬を中心とした地域に限定されそうである。

主体部の構造としては、短冊型石室は6世紀後半代の一般的特徴であり、児玉地域ではその編年が確立されている（註16）。

又、墳形に関しては、秩父地方には2基の前方後円墳が存在し、その一基は全長13mの太田部塚山古墳群であり、行政区はともかく、毛野の隣接地で、秩父盆地とは程遠い。一方、大野原古墳群中の一基も破壊が激しく、現在の知見では、前方後円墳とするには資料不足である。勿論、前方後円墳の終末は、北武藏では7世紀の第1四半期までとされており、短冊型石室の存在する当地域にも十分予想される所である。

ここでは、資料の整った天神塚を検討し、横穴式石室の出現を追ってみたい。

奥壁幅1.15m、高さ1.5m、全長6m前後というプロポーションは、古式な横穴式石室の形態である。これに加え側壁に片岩を使用し、天井は低く、副葬品こそ見られないが、墳丘には埴輪を樹立していた事が推定される。

石室平面プランの特徴としては、一辺が直線で片方がやや羨道部で狭くなる形態をなす。

これに類似した石室としては、北塚原7号墳（註17）が挙げられるが、当石室の方が奥壁が幅広で、やや後続形とも見られる。

いずれにしても、児玉地域の石室と比較した場合6世紀末に下る特徴はなく、6世紀第3四半期に位置づけられるものと考える。

児玉地域に於ては、横穴式石室の出現は6世紀第2四半期に見られるが、当秩父地方にあっても左程遅れる事はなかったものと言える。勿論、当金崎の地が、現在でも児玉郡に通ずる最短距離の地に占地している事は、古墳伝播ルートを暗示するものであり、甲斐や信濃と通じる大滝、両神村等に古墳が分布していない事象は、この傍証ともなろう。

古墳終末期に関しては、大野原古墳群中の蕨手刀、和銅古錢出土古墳と、半地下構造の横穴式石室がある。

半地下式に横穴式石室を築造する方法としては、塚本山古墳群、鹿島古墳群等の7世紀代に最盛期を迎える古墳群中に良く見られる。時間的には、7世紀でも後半に構築されるものが多く、大野原古墳群でも同様な時期の所産と考えられる。

副葬品に関しては、追葬の可能性があり、必ずしも古墳構築時を表わしているとは限らない。

前述する2遺跡でも、前庭部には8世紀代の土器を供獻してはいるが、必ず7世紀代の土器が混じっており、確実に8世紀代に構築されたという古墳は見当らなかった。

古墳の終末は多分に政治的色彩が濃く、北武藏における群集墳の終末が、7世紀の第4四半期である現象と機を同じくし、当秩父地方も終焉を迎えていたものと考えられる。

終末期古墳を何によって押えて行くかは、古墳の概念規定にもよるが、追葬現象は現実に認められる今日、7世紀代古代寺院址との関連で再検討せねばならない事象もある。

以上、秩父の古墳の成立を6世紀の第3四半期に、終末現象を7世紀代として理解してみた。

おそらく、前述する飯塚・招木古墳群で代表される様な大部分の群集墳は、7世紀第2四半期以後構築されたものであり、北武藏に見られる塚本山、鹿島古墳群、比企地方に見られる横穴と同様な時期に出現するものと考えられる。

しかし、秩父地方が必ずしも水田に恵まれた地域でもなく、その生産基盤の問題が残る。

今後、秩父地方に於ける7世紀代の群集墳成立基盤を、製鉄、銅、牧、養蚕等の何れかに求め、その諸条件を十分加味し、古代秩父の置かれた特性を追求してゆく事を課題としてゆきたい。

(増田逸朗)

註

註1 埼玉県教育委員会「古墳調査報告書第2編—秩父市及び秩父郡古墳調査—」昭和32年

註2 田中一郎「金崎古墳群」埼玉県指定文化財報告書第12集 昭和55年

註3 三友国五郎「円墳大塚古墳」埼玉県指定文化財調査報告書第2集 昭和38年

註4 註1に同じ

註5 亀倉貞雄「飯塚・招木古墳群」秩父市文化財調査報告書 昭和50年

註6 亀倉貞雄「埼玉県秩父市金室古墳発掘報告」埼玉研究創刊号 昭和32年

註7 村井嵩雄「衝角付冑の系譜」東京国立博物館紀要第9号 昭和49年

註8 註1に同じ

註9 柳田敏司「秩父市大野原出土の蕨手刀」埼玉考古第2号 昭和39年

註10 大塚初重「埼玉県秩父市原谷第1号・第4号墳」日本考古学年報8 昭和34年

註11 註1に同じ

註12 埼玉県教育委員会「塚本山古墳群」埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 昭和52年

註13 埼玉県教育委員会「鹿島古墳群」埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集 昭和47年

註14 増田逸朗「川本村箱崎古墳群の報告」第1回遺跡発掘調査報告会発表要旨 昭和43年

註15 埼玉県遺跡調査会「青柳古墳群発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第19集 昭和48年

註16 増田逸朗「北武藏における横穴式石室の変遷」信濃29—7 昭和52年

註17 増田逸朗「児玉郡神川村北塚原古墳群」第4回遺跡発掘調査報告会発表要旨 昭和46年

(2) 繩文土器と石器について

周辺の遺跡

上ノ台遺跡においては繩文前期の黒浜式、諸磯 a、b 式土器が若干量出土した。繩文期の遺構は検出されず集落として確認できなかったが、周辺に該期の集落の存在が予想される。石器の出土量は土器量に比して多く、大形の打製石斧が表面採集されている。これは、繩文中期におけるものと思われ、土器は表採されていないが、中期にも生活が営まれたであろう。

周辺の繩文期の遺跡は、長瀬町の北部に大日影遺跡があり、草創期、早期の遺物を出土する。南の皆野町では、上ノ台遺跡より荒川の上流 2 km の右岸に、11軒の敷石住居址と箱式石棺が検出された大背戸遺跡、同じ箱式石棺が検出された中期の駒形遺跡が隣接して存在する。皆野町内には、この他、早期を主とした三角穴洞窟遺跡、勝負沢洞窟遺跡が荒川左岸を流れる支流に面して存在する。他に荒川右岸に、黒耀石を主とした石器群を出土した吉丸遺跡がある。更に西の吉田町には、早期から中期の彦久保岩陰遺跡、前期を主としたわらび沢岩陰遺跡がある。

各遺跡は未報告あるいは概報が多くそれぞれ貴重な資料であり、正式報告が期待される。

土 器

出土土器は極く少量であり、拓本図に示した土器以外は、若干量、極く小破片が出土したのみである。土器は黒浜式、諸磯 a・b 式土器が出土しており、諸磯 b 式土器は浮線文土器のみであり破片数は最も多い。浮線上には繩文と刻み目が施文されているものがみられる。同一破片上に両方の施文があるものもみられる。浮線文上に繩文が施文されるものは、浮線文土器中でも比較的古くなるとされている（土肥1975、中島1980）。口縁部文様体をつくる破片15、19は、隣り合う浮線上には互いに異方向の刻み目が施されている。モチーフは渦巻状である。15、19の口縁の内彎は比較的ゆるいものである。器形としてはやや古いものであろう。又、15にみられるモチーフは渦巻というよりも横位の浮線文どうしを弧状に連続させたようにみられる。他の破片は胴部破片であり、浮線文が横走したモチーフのみであり、数本を一単位としてめぐっているものである。刻み目が互いに異方向に施され、矢羽根状を呈している。23のみ浮線の間隔がやや離れている。浮線文土器は3次調査に一括して出土しており、浮線文土器中、ほぼ同一期の所産と考えられる。18は、浮線の施文されない箇所で屈曲のみられる土器である。算盤玉状の底部をなす器形であろうか。

3～5の土器は、櫛歯状横走沈線と波状文が施され、更に円形刺突文が施される。横走沈線が文様体区画をなし、文様体内を波状沈線が施文される。円形刺突文は縦に並び沈線の施文の有無を問はず施される。8～12の繩文のみの土器はそれぞれ微妙に異なるものであるが3～7の土器と伴出しており諸磯 a 式と思われる。

石 器

石器は土器量に比して若干多く出土した。2次調査出土石器は伴出した土器が諸磯 a 式のみであり、該期の石器と考えられる。出土石器は大略打製石斧である。このうち次の石斧は特に前期の石斧としての特徴を有していると思われる。5. 頭部を欠失しズンドウ形、2.、6. 厚みがある。剥離がよくなされた分銅形の石斧。更に表採品の中では、20. 短冊形、21. 柳葉形、22. 小判形、25. 挽形

も同様であろう。このうち2、6は形態がやや定式化している。

遺跡は荒川の石器の原材の豊富な場所に立地しており、原材の供給地となりうる場所であり、周辺の遺跡には製作址の検出も可能と思われる。上ノ台では大形の打製石斧が7点ほど出土しているが、これも原材の豊富さに規定されるのであろう。

(曾根原裕明)

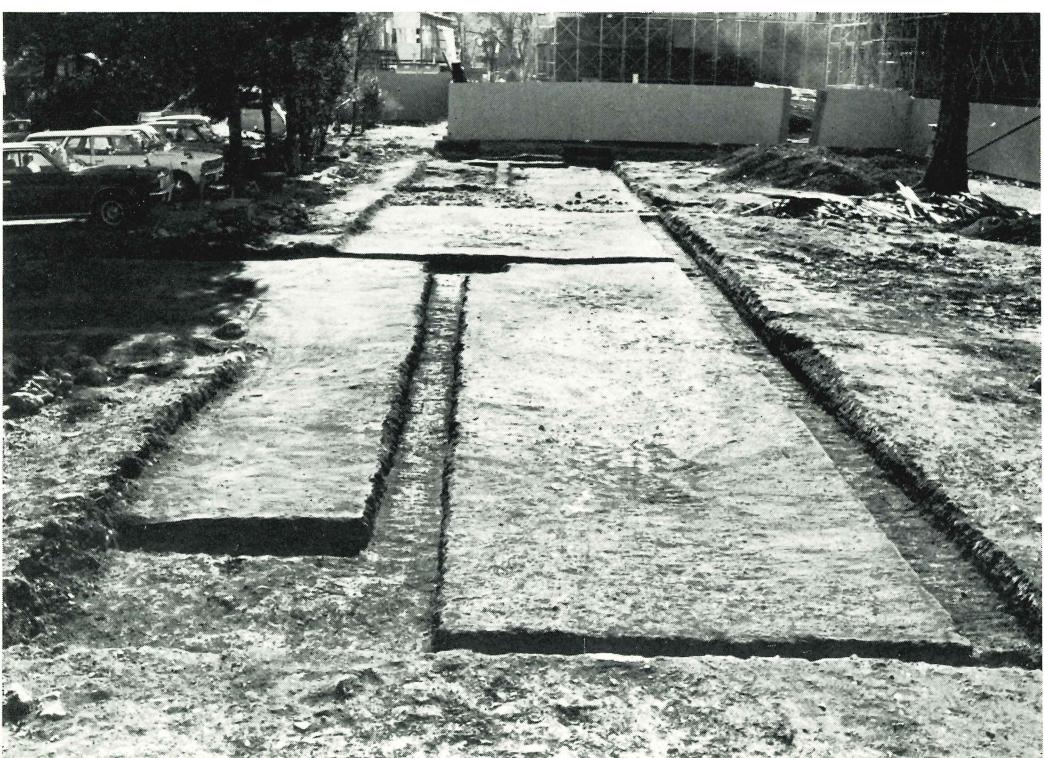
参考文献

- 埼玉県 1980 「新編埼玉県史(資料編Ⅰ)」
- 小林 茂 1966 「秩父・彦久保遺跡(第一次調査概報)」 吉田町教育委員会
- 岡本 勇他 1979 「諸磯遺跡とその周辺」 三浦市教育委員会
- 岡本 隆男 1973 「平台貝塚」
- 鈴木 敏昭 1980 「諸磯b式土器の構造とその変遷(再考)」 土曜考古2号
- 鈴木徳雄他 1978 「白石城」 埼玉県遺跡調査会報告第36集
- 清藤一順他 1975 「飯山満東遺跡」 房総考古資料刊行会
- 谷井 彪 1970 「内畑遺跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告第7集
- 中島 宏 1980 「伊勢塚・東光寺裏」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集
- 土肥 孝他 1975 「針ヶ谷・北通遺跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告第26集
- 村田一二他 1979 「野田市北前貝塚」 野田市郷土博物館
- 小川良祐他 1977 「前畠・島之上・出口・芝山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集
- 斎藤基生他 1974 「平山橋」 東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
- 水村孝行他 1978・1979 「舞台(図版編・本文編)」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第17・18集

図 版



第2次調査区 発掘風景



第3次調査区 全 景



第2次調査区 土 壤



第2次調査区 溝



第 2 次調査区 溝内土器出土状態



第 3 次調査区 磚



石室全景及び閉塞石



玄門部閉塞石



石室全景



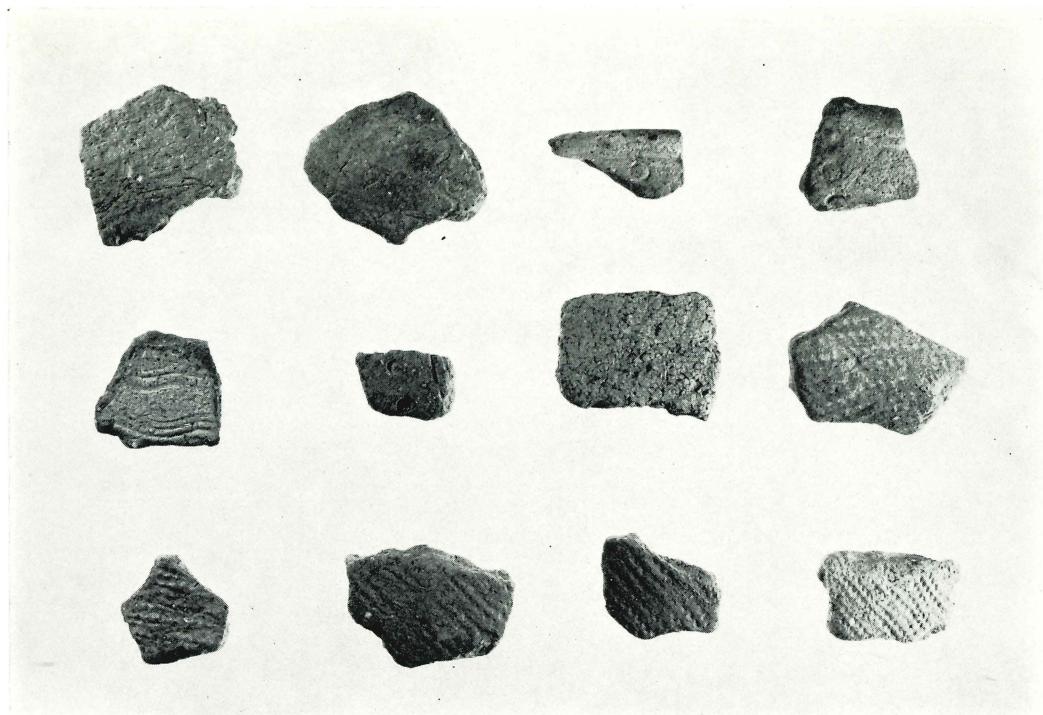
付近の古墳近景



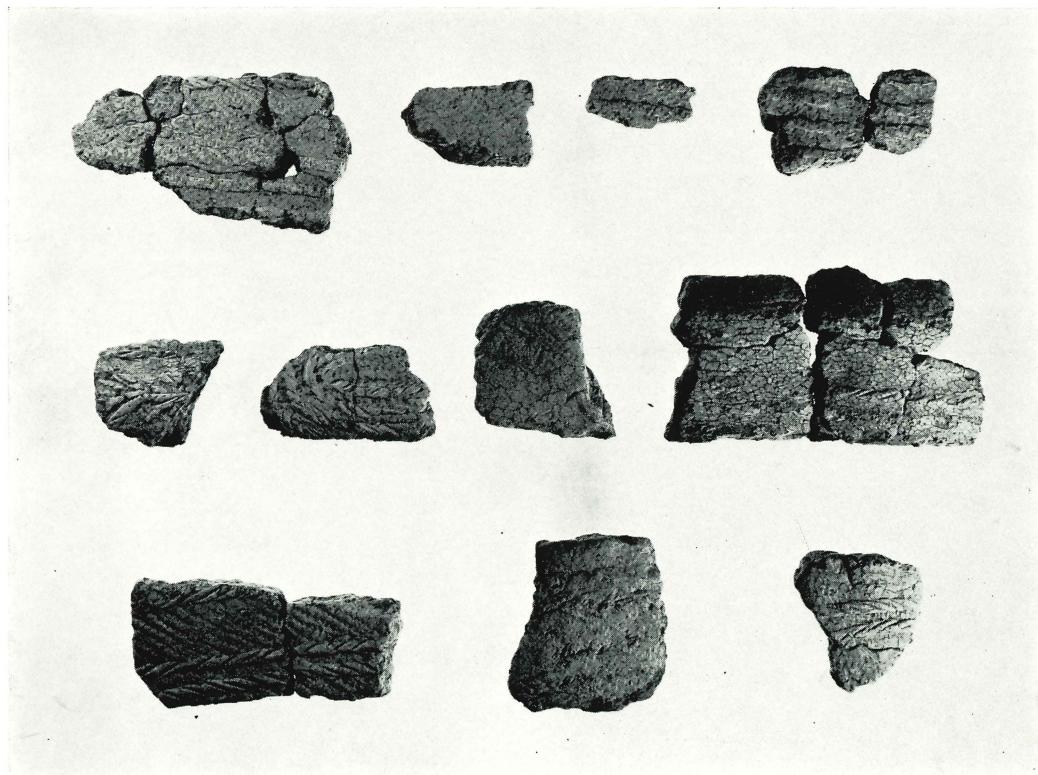
付近の古墳近景



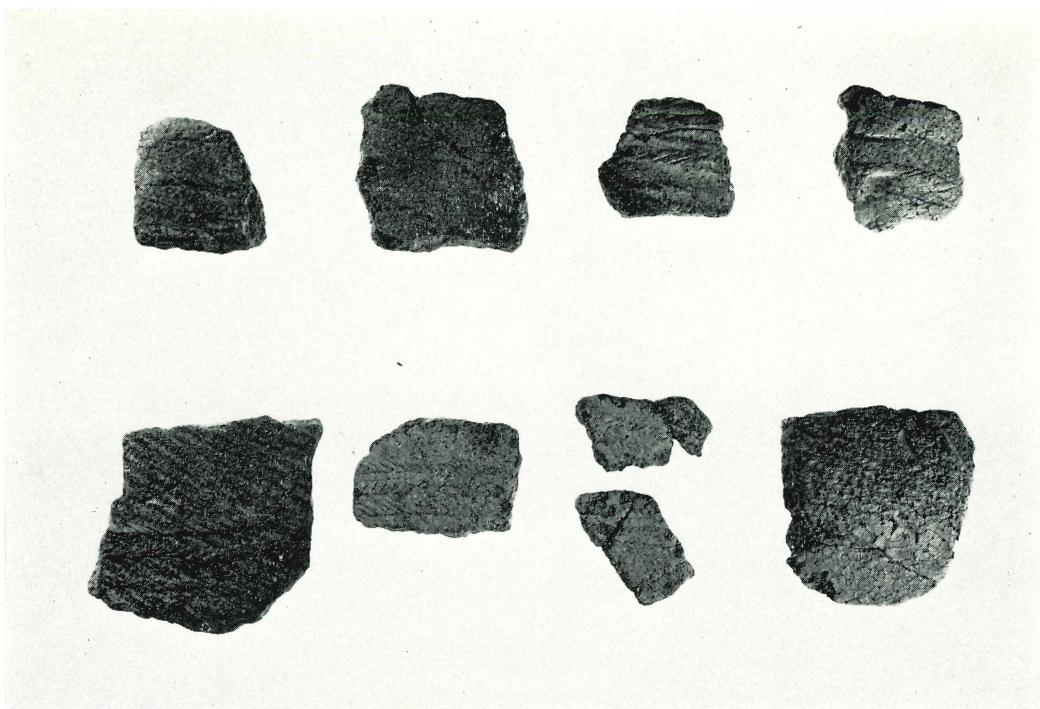
露出した玄門



繩文土器



繩文土器



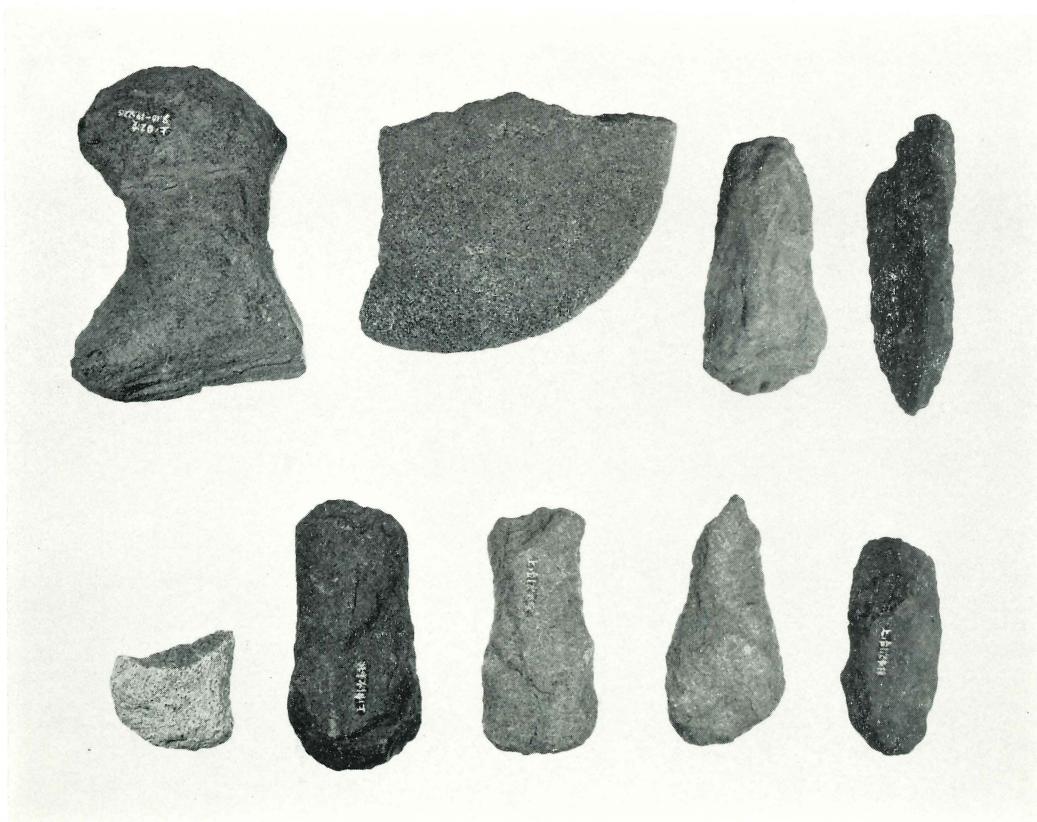
繩文土器



溝出土須恵器



打 製 石 斧



打 製 石 斧



打 製 石 斧



打 製 石 斧

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第4集

上ノ台遺跡

昭和56年3月20日 印刷

昭和56年3月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

印刷 株式会社 誠美堂印刷所